

白金蔵

8月号



平成29年8月発行

第78号

九月十五日（金）駒場吟行句会・駒場住区セ一時～五時	九月二十二日（第四金）正午～三時第三兼題・美術の秋、秋鯖
十月二十日（金）正午～三時第三兼題・鶴、朝顔の実	兼題句参考句（九月二十一日分 美術の秋、秋鯖）
秋鯖を心祝ひのありて買ふ	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
秋鯖や味噌煮の味噌の多寡を問う	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
夫と来てはなればなれに美術展	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
絵筆すてしわれに美術の秋来れど	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
美術の秋上野にぽんと降り立ちて	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
院展や蓮の模様の帶しめて	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
日展の流れ三日の銀座かな	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
二科展の女の臍と向ひ合ふ	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
あくびせる日展ガール膝毛布	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
日展をふたたび訪ひて恋ふ絵あり	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
コーヒー喫む美術の秋の森の中	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
秋鯖に味噌は三河の八丁ぞ	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
秋鯖の仕入ごころをそそのかす	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
秋鯖の大の一尾を値切りゐる	秋鯖や上司罵るためて醉ふ
秋鯖の一本棒のどこ掴む	秋鯖や上司罵るためて醉ふ

宮下翠舟 草間時彦 宮下翠舟 草間時彦
熊坂淑 龍神悠紀子 上村占魚 高澤良一
依光陽子 小野口正江 仲村美智子 衣川砂生 河野紀代乃
山口青邨 吉田汀史 鈴木貞砂女 佐藤鬼房 坂巻純子

*同居のみちさんが何を思つたか、山中湖畔の三島由紀夫記念館にもう一回行こうというので、安いSOAの宿を予約して、朝出て昼過ぎには入館できた。私は三島由紀夫の書斎の本棚の本をよく見た。源氏物語もあつた。芭蕉の本は一冊しか見えなかつた。司馬遼太郎の本棚が天井までぎつしりあつた如く、ここでも同じような本棚をみた。ビデオも観た。出口に架かつていた檄文も全部読んだ。私は金閣寺しか読んでいなかつたので、ここで「暁の寺」を買って読みつつ帰り、今も読んでいる。原稿用紙の字が大きくきれいなのは中原中也と同じだ。その小説の文章の緻密なこと例えば本多と通訳の菱川が訪ねて行つた薔薇宮という宮殿に着いた時の文章は左の通りだ。

「薔薇宮はそれ自体が自分の小さな頑かたくなな夢のなに閉じこもつたかのようだつた。翼楼もなく展開部もない一つの小宮のような建築の印象がこれを強めた。一階はどれが入口かわからぬほど多くの仏蘭西窓に囲まれていたが、その一つ一つが薔薇の木彫を施した腰板の上部に、黄、青、紺の亀甲の色硝子を縦につらね、そのあいだにさらに近東風の五弁の薔薇形の紫硝子の小窓を填め込んでいた。庭に面した仏蘭西窓は悉く半

開きにひらいていた」そして中に入れられて「姫の出御を待つあいだ、宮殿のうちらを子細に眺め渡した。どこかでしている低い蠅の羽音のほかには物音はなかつた。広間は直に窓に接しているのではなかつた。中二階を支えた迫持の柱廊がめぐり、中央の玉座の前だけは、迫持から厚く重い帳を垂れ、その玉座の上に当る中二階の正面に、チュラローンコーン大帝の肖像画が懸つっていた。柱廊のコリント様式の柱々は青地に塗られ、縦の溝々は金泥を充たし、柱頭飾りは近東風の金の薔薇がアカンサスの代りをしていた。建築の専門家でもこの文章からそのものを正確に思い描くことができるだろうか。迫持とはアーチ状に煉瓦を重ねるとお互いが圧縮し合つて迫り持ち梁の機能を持つ。文学作品にも比較的多く出る言葉だ。チュラローンコーン大帝とは国王のラーマ5世のこと、コリント様式はギリシャ建築の柱の様式の一つで、ドーリヤ式、イオニア式と並んで柱頭の飾りの違いで区別される。アカンサスとは植物の名前であるが、この葉が柱頭を飾るモチーフ（題材）となつてゐる。以上は三島由紀夫の文章に驚いたことを書いたまでだ。この小説の真髓は別の機会に書くつもり。十七歳の時の俳句は「ナプキンの角するどしや冬薔薇」で本人は気に入らなかつたが、山口青邨が褒めた作品であつた。享年45歳。

*左の彩136号の時計草の句、平野ひろし主宰の巻頭句にて、『不思議な国のアリス』に言及されている。今の中一の英語の教科書が余りにも幼稚に思えたので、こんなものはさつさと読み終えてイソップとかアガサクリステイとか不思議の国のアリスでも読んだ方がいいと言い置いて帰つてきたら右の彩が来ていたので我が意を得たりと思いここに取り上げた。更に時計草の過去の句も探してみた。時計草の花はほんとに時計のよう見える。小路悦子さんの句はこの時計草がアリスの国の時を刻んでいるのだと断定した飛躍の句だ。時計草という季語にアリスの国を関係づけたメカニズムつまり構成したところが新しいと書かれている。このような文学作品の世界まで取り合わせの対象とすると構成の世界は無限となる。芭蕉時代の談林俳諧や漢詩調俳諧などがその源流にある。誓子先生の取り合わせもそこまでは広げていなかつたと思う。ひろし先生の格を出でんとする試みであろうか。

受贈誌（H 29年8月号）

偽の世の偽の竹筒水羊羹
貝割菜露を掲げて土を出づ
まつすぐの道は海まで夏燕
荒鋤田浸入る水の日を返す
(リ) (リ) 平野ひろし
(彩136号) 湤田かづ江
柿野秋生

こだま

すかんぽの赤穂立つ土手夕日差す (彩136号) 光成高志
森林浴御神木切株も見る (リ) リ

賢治における土俗と近代

武者昭七

—詩「産業組合青年会」について—

この詩はいきなりひとりの組合員の激しい怒りの声から始まる。「祀られざるも神には神の身土がある」とあざけるようなうつろな声でそういうのだ。「声のぬしはいったい誰なのか。声のみが席をわたつて響いてくる。すぐに息巻いた声がかえつてくる。「祭祀の有無を是非するならば卑賤の神のその名にさえもふさわぬ」と。「たとえ祀られてはいなくとも神には神の身土といふものがある。それを犯してはならぬ」といっぽうは云い、もう一方はそれに激しく反論する。「祀りのあるなしをいうならば卑賤の神などはカミミというにも値せぬ。」とかれはいう。白熱した議論はなおもつづくだらう。しかし詩はこれ以上は語らない。

かつては山川草木には神がやどり、ひとびとは神をあがめ親しみ畏れてくらしてきた。近代という大波はそんな暮らしを根こそぎにした。たとえば童話「狼森

と笊森、盜森」(大正十一年)のように入植者が森のゆるしをえて土地をひらき神々と悲喜をともにしてきた牧歌的な時代はさつたのである。かつての神々は邪神や淫神として路傍に打ち捨てられ文明という新しい神が山を崩し森を切り払い人々はその余沢を追うことには懸命となつた。神はその神土を追われてさまよいだすだろう。明治三十三年、政府は産業組合法を制定、その普及に力を入れ出す。農村の近代化と生活の改善が狙いであつた。その結果賢治の里でも、「部落部落の小くみあいがハムをつくり、羊毛を織り、医業を分かち、村ごとのまたその連合の大きなものが、山地のひととこ碎いて石灰岩末の幾千車かを餓えた野原にそそいだり・・・」という暮らしを生んだ。青年会の熱誠有為な若者たちは新しく手に入れた近代的な暮らしと引き換えて古い土俗に根差した文化は投げ捨てていく。祀られざるも神には神の神土がある」となおも老いて呟く老人。それに共鳴するのか「それは誰だ」という悲痛な叫びで詩はとじられる。(真土)とは過去の行為の報いとして受けた現在の心身と、そのよりどころとなる環境世界。国土とそこに住む人のこと 中村元「仏教語大辞典」)。

次に詩の主要部をかかげてみよう。

祀られざるも神には神の神土があると あざけるやうなうつろな声でさう云つたのはいったい誰だ・・・

雪をはらんだつめたい雨が闇をびしひし縫つてゐる・・・まことの道は 誰が云つたの行つたの さういふ風なものでない 祭祀の有無を是非するならば卑賤の神のその名にさへもふさはぬと 応えたものはいつたい何だ いきまき応えたそれは何だ・・・中略・・・部落部落の小組合が ハムをつくり羊毛を織り医薬を分かち 村ごとのまたその連合の大きなもの山地の肩をひととこ碎いて 石灰岩末の幾千車かを 養えた野原にそいだり ゴムから靴を鋳たりもしやう・・・中略・・・しかもこれら熱誠有為な村々の處士会同の夜半 祀られざるも神には神の神土があると 老いて呟くそれは誰だ (大正十三年十月五日作・春と修羅 第二集所収)

賢治は中学時代からふるさとの岩手山や早池峰山によく登つた。そこで古い祠にふれたり神秘的な体験やらを経験したらしい。ここに見られる老いたるひとの土俗的な宗教観の根底にはそれがあろう。同じ日付の作に「業の花びら」があるのでそれを掲げる。

夜の湿氣と風がさびしくいりまじり 松ややなぎの林はくろく そらには暗い業の花びらがいっぱいですたくしほは神々の名を録したことから はげしく寒くふるえてゐる

「神々の名を録する」とは名を記録にとどめ、それ

を祀るということだろうか。それは身土を奪われて流謫の身となつた神々のためのせめてもの鎮魂のいとなみということだろう。(それと羅須地人協会の近代的な賢治の行動とどのようにつながっていくのだろう)。土俗と近代の矛盾がいま賢治をおしつつんでくるのだ。そのなんという暗き寂しさ。賢治はそれに懸命にたえているのだ。芭蕉のかるみ以後 (36) 光成高志

酒債尋常往處有クニリ

人生七十古來稀

詩あきんど年を貪ル酒債哉サカチ

基角

酒代のツケは毎度のこと、行く先々の店に貯まつてゐる。この人生、七十歳までの長生きは滅多にないから、詩をあきないとしている私は、酒代のかきむのも意に介せずに、残り少なくなつた歳末を飲み暮らすという発句。野ざらし紀行の途次大垣に谷木因を訪ねた時、木因が芭蕉を桑名へ案内する。その時の道行が「句商人」という題で俳文(桜下文集)に書かかれているのはこの言葉を木因流に使つたものであろう。この発句の前書きは次の杜甫の「曲江」の第三・第四句をそのまま用いた。

朝回日日典春衣 朝より回りて日日春衣を典し、

毎日江頭盡醉歸 每日江頭に酔ひを尽くして帰る。

酒債尋常行處有 酒債は尋常行く処に有り。

人生七十古來稀 人生七十古來稀なり。

穿花蛱蝶深深見 花を穿つ蛱蝶は深深として見え。

點水蜻蜓款款飛 水に点ずる蜻蜓は款款として飛ぶ。

傳語風光共流轉 伝語す風光共に流転して

暫時相賞莫相違 暫時相賞して相違ふこと莫れ、と。

冬湖日暮て駕レ馬鯉

芭蕉

詩あきんどの発句につけた脇である。冬湖暮れて馬に鯉を乗せて帰つてくる。曲江は長安の東南にあつた池の名前だから冬湖としてその雰囲気を維持させたのでしよう。駕レ馬鯉が芭蕉の漢詩的語だ。冬湖と音読みに書いた所など発句の杜甫の詩の余情を踏まえている。

干鈍^{ホコ}き夷^いに閑^いをゆるすらん

全

前句を打ち続く太平の世に暇になつた辺境の兵士たちがのんきに鯉を釣つている体と見立てて、あれでは干戈^{ホコ}鈍^いき夷^いにも閑所を打ち破^るられてしまうだろう。この第三句は長け高く穩やかにこれらの歌仙の発展しやすいように広い空間を用意したのである、とは小宮豊隆氏の解釈である。

二線^{さみせん}。人の鬼を泣^なしむ

角

三線は三味線のこと。句読点を入れてあるのは漢詩訓読の形式を表して漢詩調のおもかげを保つてゐるのだ。三味線の音色に柵外の夷、つまり人の鬼も涙を流して聞き入つてゐる。前句の閑を許したのは干鈍^{ホコ}き夷^いを放浪の芸人と見立てたからである。

月は袖かうろぎ^{ねむ}眠^{ねむ}る膝のうへに

月の定座である。月下に三味線を聞いてゐる人の膝の上にころろぎが眠つてゐる。無念無想の体だ。こほろぎが鳴くのではなく、眠ると言つたところに前句のおもかげを残し三味線の音色に聴き入る人の姿をつけた。

鳴^{しき}の羽^はしづばる夜深^{ふか}き也

蕉

月明の中で人を待つ人は鳴の羽搔きの音がやかましいのでそれを縛つて音を立てさせないようにした。鳴の羽根搔きは「曉の鳴の羽がき羽がき君が来ぬ夜は我ぞ数かく」(古今集)にある」とく、飛び立つとき大きき羽音を立てるので「しづばる夜深き」とした夜はしんしんと更けていく。

恥しらぬ僧を笑^わふか草薄^は

全

鳴の羽をしづばる、そんなことをするのは恥知らぬ僧である。それを笑つてゐるのであらうか鳴の隠れる草薄は、徒然草に似た話があると高藤武馬氏は書いてゐるが、私にはこの恥知らずの僧は鳴を殺してはいないので違うと思う。それともひどすぎた話なので芭蕉がやさしく受けたのかも知れない。鷗外が山椒

大夫に於いて書き換えた如く。

しぐれ山崎 傘からかさ を舞まぶ

時雨降る中を山崎の遊女のもとに通う男が傘をさしながら流

行きの踊り歌を歌いつつ、踊りの身振りをしている。前句の恥
しらぬ僧は業平躍おひき 歌を佛にしてつけた。高藤氏はその躍歌
の歌詞を紹介しているが、長く少しエロチックなのでここでは
割愛する。いつの世も男女の心は変わるものだし。基角の付
け句は中世から近世へ引き下がったところやその表現をここに眺
めればその才に驚嘆せざるを得ない。

笹竹のどてらを藍あい に染そめ なして

蕉

前句の伊達男にふさわしい衣装を細述して当時の風俗をつけ
た。芭蕉も若い時町奴などの丹前つまりどてら姿を親しく見て
いたのだ。笹竹の模様を藍に染めたどてらである。日本歌謡集
成にある山崎通いの歌謡をここでも高藤氏は紹介している。

狩場の雲くも に若殿わくだ 恋こい

角

一の姫里の庄家カ に養く はれ
一の姫様が故あって里の庄屋に里子に出されているのである。
わざと庄屋でなく、庄家カ どルビをふつてるのは「長恨歌」の
楊家を連想させ、この姫は楊貴妃になるような美麗であると匂
わせている。その姫が前句の若殿を秘かに恋しているのである。
高藤武馬氏は高貴な姫の孤独感から恋しているという恋の動機
を書いておられる。楊貴妃が君王に選ばれる前に恋する男がい
たのかも知れないぞと芭蕉が匂わせているのだ。

軒名いふ にたつと云題セメ を責せ けり

角

そんな美しい姫であるのに、浮名立つではなく、軒名に立つ
という題で歌を作れなんて、ひどいわと責められたという句。
基角は大酒飲みの上、雷のよくな軒をかく男であつたし、「不生
不滅の心」をと前書きして「海棠の軒を悟れねはん像」という
発句を作る男であつた。海棠のよくな湿氣のある土地に咲くた
おやかな花に軒をかかせ、そこに耳を傾けて不生不滅の心を悟
れというのは基角の奇抜な発想である。芭蕉が後に杜國の大軒
に往生して図化したのが残されているぐらいだから軒に驚きは
しない。軒も音楽の一つくらいに思つていていた時代と思う。

た時代である。芭蕉は既に「貝おほひ」で存分に書いたところ
だ。それを興味本位に芭蕉が男色であつたと書く人が結構多い。
芭

ほとゝぎす怨の靈と啼かへり

蕉

お便り広場（到着順、敬称略）

ほとゝぎすを聴こうと夜を起き明かしているのに、軒がうるさくて、ほとゝぎすが怨みの靈と化して啼き返つてゐるよという芭蕉の怨みも入れておどけたものであろう。ほとゝぎす程古来から様々な文書に登場し、杜鵑、杜宇、蜀魂、不如帰、時鳥、子規、田鶴など、漢字表記や異名が多い鳥はない。中国の故事から書き写すと、長江流域に蜀という傾いた国があり、そこに杜宇という男が現れ、農耕を指導して蜀を再興し帝王となり望帝と呼ばれた。後に、長江の氾濫を治めるの得意とする男に帝位を譲り、望帝のほうは山中に隠棲した。望帝杜宇は死ぬと、その靈魂はホトトギスに化身し、農耕を始める季節が来るところを民に告げるため、杜宇の化身のホトトギスは鋭く鳴くようになつたと言う。また後に蜀が秦によつて滅ぼされてしまつたことを知つた杜宇の化身のホトトギスは嘆き悲しみ、「不如帰去」（帰り去くに如かず。）と鳴きながら血を吐いた、血を吐くまで鳴いた、などと言い、ホトトギスのくちばしが赤いのはそのためだ、と言われるようになつたとか。金子兜太氏は近くの寺に来て、時鳥がテツベンハゲタカと鳴くのはけしからんと講演される。芭蕉が仏蘭西語を知つていたならセラヴィと云つて両手を広げ肩をすくめるといつてゐる。

ほとゝぎすを聴こうと夜を起き明かしているのに、軒がうるさくて、ほとゝぎすが怨みの靈と化して啼き返つてゐるよという芭蕉の怨みも入れておどけたものであろう。ほとゝぎす程古來から様々な文書に登場し、杜鵑、杜宇、蜀魂、不如帰、時鳥、子規、田鶴など、漢字表記や異名が多い鳥はない。中国の故事から書き写すと、長江流域に蜀という傾いた国があり、そこに杜宇という男が現れ、農耕を指導して蜀を再興し帝王となり望帝と呼ばれた。後に、長江の氾濫を治めるの得意とする男に帝位を譲り、望帝のほうは山中に隠棲した。望帝杜宇は死ぬと、その靈魂はホトトギスに化身し、農耕を始める季節が来るところを民に告げるため、杜宇の化身のホトトギスは鋭く鳴くようになつたと言う。また後に蜀が秦によつて滅ぼされてしまつたことを知つた杜宇の化身のホトトギスは嘆き悲しみ、「不如

帰去」（帰り去くに如かず。）と鳴きながら血を吐いた、血を吐くまで鳴いた、などと言い、ホトトギスのくちばしが赤いのはそのためだ、と言われるようになつたとか。金子兜太氏は近くの寺に来て、時鳥がテツベンハゲタカと鳴くのはけしからんと講演される。芭蕉が仏蘭西語を知つていたならセラヴィと云つて両手を広げ肩をすくめるといつてゐる。

暑中お見舞い申し上げます。猛暑のみぎりお変わりありませんか？白金葭七月号届きました。ありがとうございます。私は元気です。畑の雑草と格闘しています。先日免許

（7.29 瑞子）

暑中御見舞い申し上げます。きびしい暑さが続きます

ですが元気ですか？私は元気です。元気な身体に生み育ててくれた母に感謝しながら小さい事にも喜びを感じながら生活しています。奈良行き楽しみにしてます。身体の調子をこわさずに気をつけて皆さんと一緒にしたいと思つていてます。お身体に気をつけて一人で元気ですね。

（8.1 幸子）

つぎつぎに音がこわしてゆく花火（松下停露句）

（8.8.百合子）

暑中お見舞い申し上げます。猛暑のみぎりお変わりありませんか？白金葭七月号届きました。ありがとうございます。私は元気です。畑の雑草と格闘しています。先日免許

認知症検査に行つてきました。合計点86点運転に問題はありませんと通知もらいました。又三年乗れるとのこと。農作業と野鳥防除に日は沈み (8.2 健三)

毎日暑いね。みんな元気ですか。私は好きな事をして過ごしています。気に入るかどうかわからないが送ります。おばあさんの壁掛けは百円均一のダイソーに行くとうすいコルクボードに1.5cmくらいの縁が付いた額まがいのものが売っています。一番大きい三百円を買ってピンでとめるとよく見えます&ベンケース敏

子様&ベンケース高志様&絹のバッグ&小銭入れ&鳳梨萬頭 (おんらいまんとう) (8.2 政子) 吳銘算

暑中御見舞い申し上げます。猛暑のみぎり皆様お変わりなくお元気でお過ごしでしょうか。年をとると冬より夏の方がありがたいと言つていたのですが、このいつまでも暑さが続いたのではいくら夏好きの私でもこたえます。兄さんも元気で毎日を送つてているのですね。ハガキ頂いてうれしく思っています。どうぞお体大切にお暮し下さいますよう祈っています。 (8.3 峯子)

七月号拝受し全てを熟読し、濃い内容に感銘しました。七月の兼題は「青林檎・森林浴」でしたが、なかも森林浴は都会人にとっていまだに縁遠いものであるだけに客観的写生よりは観念的構成の句作を迫る季題といえそうです。幸い私は田舎育ちで深い森林が身

近にあつたので感覚的に分かるつもりでしたが、いざ句作となると苦吟を免れませんでした。苦手の英作文に苦闘した学生の頃をふと思い出しました。句会では立派な句が続々披露され、七月号誌上には行き届いた鑑賞が並んでいるのを見ると、流石は白金霞であると三嘆の思いです。おこがましいですが、七月号を読み二、三読後感を記します。

「森林浴みんなでうたふ木遣歌」「木のチップ敷かれ森林浴の道」(みら)「森林浴檜翌檜櫻の氣」(高志)信州上松の地で森林浴を体験して生まれた実地観照の句。風土の真髓に触れる吟行というものがいかに大切か、また写生の有効な方法でもあることがよく分かります。幸一さんの「受けて見よ抛るよ恋の青林檎」がユーモラスで其角ばりの奇想ぶりで、じつに新鮮です。これぞ芭蕉のいう軽みではないかと思いました。孝三さんの「神宮は東京の臍森林浴」も首都のど真ん中で森林浴という着想が面白い。ひとたび明治神宮の森に身をおけば鬱蒼とした神域の参詣がほとんど山林浴であります。まさに実感の写生句。神宮の森は木曽の自然休養林と同じく人手の加わった人工林ですが、地質的に合わないため木曽と違つてヒノキ系の針葉樹はほとんど無いといわれますが、深山の印象を濃厚です。表紙を飾る白金霞の写真は、主宰が手賀川河畔の群生にレ

ンズを向け、定点観測のように月毎の微妙な変化を撮影したもの。いうまでもなく白金葭は、お化けスキの異名をもつ南米原産の渡来植物。その群生が翕然と河畔に一里塚のようこそり立つ写真を見るたびに、私は子規の子規庵病床の句「鶴頭の十四五本はありぬべし」の句を思い起こします。この句は当時の俳人たちから簡単に見過ぎされ、子規死後に虚子など弟子たちが編んだ子規句集にも収録されていません。今日でも毀譽褒貶相半ばしている句として有名であります。この句の真価を最初に認めたのは子規の歌の弟子でもあつた長塚節でした。節は歌仲間の斎藤茂吉に「残念ながら今の俳人にこの句の良さが分かる人はいまい」と語ったという。それに茂吉は共鳴して自己形成期の語録「童馬漫語」でこの句の素晴らしさを世人に認識させました。茂吉はこの句で子規の進むべき純熟の道が始まつたとし、「もう寸毫も芭蕉でも蕪村でもない」独自の存在になつたと書いています。この秀句の発見が俳人ではなく歌人によつてなされたということが興味深く思われてなりません。

山本健吉の著書「現代俳句」でこの句を絶賛しているのを私は読んで、実に我が意を得た思いがしました。かねてから子規・芭蕉、虚子の本質に最も迫つたのは山本健吉であると愚考してきましたが、なかでも「現

代俳句」の子規論には瞠目せずにいられません。子規のこの「鶴頭の十四五本はありぬべし」について、他の評者たとえばこの句を「自己の生の深處に触れたものとする誓子にせよ、ほんどの評者が病中吟として命旦夕の病者の感傷や論理を前提に鑑賞しているのに対し、山本健吉は反対に健康人による即興感偶の写生句と断定して、その真価の追求をするのです。なにより晚秋小庭に雑然と生えた鶴頭の群落を眼前に見て子供のように喜んでいる極めて健康な精神による即興詩なのであり、無骨に強健を誇る鶴頭に子規の生命が憑り移つて互いに映発しているのが、この句なのだと解します。そこに子規の句の無邪気さ、健康さ、たくましさを発見するのです。鶴頭の雑然と群立する相とともに、その相を無心な一括のもとに大きく捕らえてしまう作者子規の主体的なつかみ方こそ、この句の肝だというわけです。鶴頭はまさに「十四五本もありぬべし」の如く生えるものであり、表現としてそれ以外はない。「感動が実体的な思惟の刻印」となつて提示され、感動から物へ、物から核心へと突きつけられる。山本健吉は現実の鶴頭よりも現実的な、力強い存在性と重量感とを持つて立つ堅固な作品の世界をそこに見て、現実の世界から作品の世界への移調無くして眞の写生もないと力説し、子規が芭蕉・蕪村を超越する独

この句で到達したというのです。これに私は痺れました。頭垂れる思いです。

毎号の表紙写真を見るたびに、かつて子規庵の晩秋庭前の鶴頭に子規が見たように、わが主宰も川風に花穂が揺れるたくましい渡来植物白金霞の群落に紛れもない実存の相を見つつあるのかも知れないと思つたりするのです。

(メール
8.4 健二)

昨日は増田さんの快気祝賀の昼食会に光栄にも招かれ、美酒佳肴と尽きない歓談に羽化登仙の思いを満喫いたしました。ご夫妻の温情に深く御札を申し上げます。話が弾み話柄も多岐にわたつて尽きず、高雅な江戸文人の清遊もかくありなんと、ひそかに思いました。じつに得難い天恵の数刻でありました。老いてなお少年の心を失わない人との交遊に優るものはこの世に無いとつくづく思いました。ありがとうございました。

(メール 8.6 健一)

我孫子日記

	7/21 例会
	7/30
*	三島由紀 夫記念館
	7/30
*2	忍野八海
	8/5 一歩亭
	8/8
*3	北総病院
	8/10 ゴッホの絵
	8/11
*4	秋元梨園

*あめんぼの王の駒置く歩の駒も

山形の風生の句碑夏の雨

澤胡桃枝の天蓋にゐて涼し

森涼し=島由紀夫の記念館

譲字瀆て余縫紳がく洋房館
「春の雪」の頃三集（秋五

八歳の公威稟々し冷房館

鬼籍ばかりの映画みてある

「暁の寺」を買つたる七日

KA B Aと云ふバス船夏富士に雲

桃冷す忍野の水の垂れ流し

桃すする麻川の下の兜虫

漢方の灸薬の力が薄を痛がる
青眼杏の釜也を賣ひを

青銅行水の事

忍野八海商魂まみれ支那まみれ

*3 バス通り迫り出す炎百日紅

*4 溝蕎麦や農具小屋より人の声

鳳仙花昨夜の雨に溶けてをり
早朝の露の二三

桑棚や轍の行きと戻りあり
四明の天井底、夙夜せら

梨朋の直立の支綱を聞之

卷之三

高志 みち 高志 リ 高志 みち

高 たか みち みち 高 たか みち

編集後記

璃子さんの東京クラブが到着する前に本誌を発行しました。盆休みには届くようにと思ってのことです。下の写真は時計草の花ですが、今は蕊が丸まつてこの花の物とは思えない様相です。

今日は虚栗を書き継いでゐて、芭蕉・基角のこと、許六や去來の風俗文選・俳諧問答を読み、考えていた最中に三島由紀夫の暁の寺に手を出して、頭が混沌として来たところです。季語と共に生活して取り合せするにもその関係づけにて季節感が出ればそれで良しと思っています。己の感情が万人の感情になるように己とたたかい普遍的なものをつかむ努力をすること、それが私の人生だと思っています。何を難しいことばかり書くのかとお思いでしようが、それが目下の私の想いですでので、後記にメモしておきました。(2017/8/13)



白金霞8月号（通巻第七八号）平成二十九年8月13日発行
編集・発行人 光成高志
発行所 二七〇-一二一九 我孫子市南新木二一四一七
fax ○四一七一八七一〇六八
表紙の題字・加納綾女 同写真は8月13日の白金霞